特別企画

光あふるる

※　悲哀調<出立>歌

厳しい圧迫の時代に，悲歌の充血したアスファルトの黒さの上に昏倒して行った無数の死霊達。そこから今，僕達は<出立>する。

かつて，始めて煙草に火をつけ，酒を飲み，女を抱いた時に理由は無かった様には，僕達は現在，<出立>することはできない。何よりも<出立>とは決意の姿勢なのだから。60年代の多くの思想や運動に引き返す事のできない僕達は，ただひたすら己れの全存在を賭けて暗い未来へと前進する以外に，戦いの道は無いが，その前にまず，累積してしまった数多くの負債を返済し，訣別の辞を吐いてゆかねば。いつからか「10・8ショックを受けてねえやつは…」と語って，一人の死者を世代の神様に微温的に奉ってしまった，僕達の内部に巣食う，政治の中の死を美化し，自己の存在の基盤に短絡的に据えて省みない安易な姿勢こそ鞭打たねばならない。それ無くして，現在の苛酷な情況の中で，何の<敵>を打撃する事ができるか。

※　私的モノローグ

楡の枝葉を通し　黄昏時の半透明な大気をくぐり抜け　初秋の乾いた橙色の残照が部屋を彩色する　三面鏡に向った おまえは　自分の姿を 確かめる様に　無言でアイラインを引いている，　おまえの淡いブルーのブラウスから盈れた白い肌，　静寂の中に立ち上る一筋の紫煙に　ぼくたちの姿は，　ある　樹々を抜けて 吹き寄せた涼風に　おまえの黒髪の香りに　ぼくの呼吸づかいは――わたしと一緒に故郷に帰って父と母に会って ……ねっ　乱れ　重く閉じた瞼をあければ 白い光の下で小さく震える肩　（こんなふうにして一人の人間の生を引受けてゆくのだな）　薄暮　九月　喧騒の街の灯は ぼくと おまえの関係を示し　四角の窓に拡がる京都の夜空の蒼　ぼくの長い髪をかき分け おまえの細い指が絡む　いつから だったのだろう　おまえを愛したのは　〝死ぬも生きるも ひとりなーら　自分でいいよに 生きたいーの　訣別　するものあまりに少なく見失ったものあまりに多かった生　ぼくは おまえに 青いリンゴを噛み締める決意の構図の美しさは示せまい　秋　かつてこの季節に一つの暗い決意が在った

闇の彼方へ

私ハ故郷デ消エル覚悟デ帰ッタガ，死ネズシテ函館行キノ鈍行ニ乗ル。
ドウシテサマヨッタカワカラナイ。
私ハ生キル。セメテ20サイノソノ日マデ。
罪ヲ，最悪ノ罪ヲ犯シテモ残サレタ日々ヲ金デ生キルコトニ決メタ。
母ヨ，私ノ兄，姉，妹ヨ，許シハコワヌガ私ハ生キル。
寒イ北国ノ最後ト思ワレル短カイ秋デ，私ハソウ決メル。

美事だ　私ハ生キル　そんな …… あまりに凄い　意識と行動の背叛性に嗟嘆に暮れた鮮血の日々は既に遠く　暗黒色に到らずセピア色に遠く色褪せる欠落感の中で　ぼくたちの生の奇妙な明るさ（ああ　遺滅の予知にうち震える衰微した心に　憐憫は いらぬが　せめて ください　子守唄を）　訣別も出立も言葉で成した 決意表明は　季節と季節　日付と日付の狭間で 爆せ散り　風化　螢光灯の青白い光の下でぼくたちの沈黙はぼくの沈黙と意味も重さも違う ―― 何をしている　いま
薄紅色の陶器の壺に挿された 一本の金木犀と　濃い珈琲の芳烈な香りの中で　ぼくと おまえの夜は更けてゆく

ん？　エイゾウ。イマージュでも風景でも無い<映像>。確かに，5月13日，午前9時52分，シージャックの川藤がたった一発の銃弾で撃ち殺される様を，同時中継で向う側から送って来た映像は十分凶暴たり得た。しかしこちら側からの映像は，今だ鋭く敵に突き刺ってはいない。テロル馬鹿の若松孝二が，じっと耐えた青年にダイナマイトを渡し，羽田に送り込んでも（現代好色伝）　交番を爆破し，共産党本部を爆破し，首相を暗殺してみても（性賊），それらは，　日常的に映画館の暗闇の中で，画面上の短刀を伝い落ちる血の流出感にホッと嘆息してしまう僕達を，　勃起させるほどの ダイナミズムを所有しなくなってしまった。僕達は映像を過信する事はできない。 情況と精神，　二重の源初のカオスの中でむしろ僕達は，白昼，不断に，　より凶暴なる<映像>を自ら創出して行かねばならない。 凍てつく二月の極寒の最中に，狂い咲く緋の桜花の夢を見るのは僕達であらねばならない。